農業と環境　（水稲栽培）

苗の準備

浸種（しんしゅ）

播種を行う前の作業で、種もみを水につけ発芽しやすい状態にすることを言います。種もみは、前年の秋に収穫したのち保管しているため、水分の抜けた状態で保管されています。そのため、発芽しやすい水分状態にする必要があります。発芽しやすい状態の種もみの形を「鳩胸状態」と言っているところもあります。

Ｑ　どのくらい水につけるのですか？

Ａ　大体　　日数　×　水温　＝　１００　が基本と言われています。でも、水温が高すぎると、種が煮えてしまします。加減をしましょう。

※　その昔は、お風呂に入った後に種をつけ、３日程度後に播種したといわれています。

Ｑ　そのほかに、何か利点はありますか？

Ａ　現在では、この浸種に種の消毒薬を使い、給水と種の消毒を一緒に行っている所もあります。

※　大子清流高校では、消毒済みの種を利用しています。ですから、新種を始めると成分が出てきて、水が青色に代わります。消毒済みの種が買えなかったときは「スポルタック」という薬剤を利用しました。

大子清流高校では、　水温　１０℃　で　１０日が目安で実施しています。